

新連載

【激流への、あくなき挑戦！】

オリンピックイヤーの2004年。現在各種競技で五輪選考会や予選が行われています。WEBマガジン「アンドリー」では、B & Gの指導者研修会やイベントに講師としてご協力いただいています、カヌー競技アトランタオリンピック

日本代表「持田^{もちだ} 雅誠^{まさなり}」選手にスポットをあててみました。

持田選手のアテネオリンピックへの挑戦とこれまでの道のりを連載で語っていただきます。

カナディアン・スラローム (C-1 クラス)
現ナショナルチームメンバー、
アトランタオリンピック元日本代表
持田雅誠 選手



第一話 岐路になった大学入学／カヌーとの出会い

思い通りにならない乗り物

カヌーとの出会いは、1991年に大学に合格した直後のことでした。たまたまテレビで、5mの滝をカヌーで下るというスリリングな挑戦に若者が挑む番組を観たのがきっかけです。それまでカヌーと言えば、野田祐介さんのようにのんびりと川を散歩するイメージしかありませんでしたので、とても興奮しましたね。

東京で生まれ、3歳のときから埼玉県の上尾市に住んでいましたが、高校を出るまでは特にスポーツらしいものはしていませんでした。だいたい、体を動かすこと自体に興味がなかったんです。テレビで観たカヌーも、競技スポーツではなくスリルあふれる冒険的な乗り方に魅せられたのです。

その後、大学に入ってキャンパスを歩いていると、カヌーのサークルが新人の勧誘を行っており、ちょうどテレビで観た冒険的なイメージが頭に残っていたこともあって入会してみることにしました。サークルの名は「早稲田大学カ

ヌークラブ」といい、当時の大学サークルはどこも盛んでしたので、入ってみるとメンバーが 40 人ぐらいいました。

それまでスポーツはしていませんでしたから、体育会の運動部には抵抗がありましたが、ここはサークルで、単にカヌーを好きな人たちが集まった集団だから、上手くやっていけるだろうって感じました。実際、入会してみると体育会のように先輩後輩の上下関係にはうるさくなく、合宿でも全学年のメンバーが均等に炊事当番にあたっていました。多摩川の上流、御岳という山あいにはクラブの合宿所と艇庫があり、そこを拠点に練習するのですが、サークルということもあって基本的には日曜日だけの練習で、10 月になると 4 月までは休止していました。ですから、体育会に比べたら遊びみたいな練習量だったと思います。

それでも、勧誘を受けて試乗にやってきた同期生はたくさんいたのに、サークルに定着したのは 15 人ほどしかいませんでした。もちろん、私も試乗してから入会したのですが、初めてカヌーに乗った感想は、「なんて思い通りに動いてくれない乗り物なのだろう」といった、苛立ちにも似た気持ちでした。試乗したのは、ちょうど、B & G の海洋センターに配置されているような、ごく一般的なシングルカヤックでしたが、とにかく陸でパドルの動かし方などを習ってから乗ったのに、何もできずに終わってしまったという感じでした。

もっとも、その思い通りにならないところが実に面白く、入会後は「今度こそ上手く乗ってやろう」といった感じで、どんどんのめり込んでいきました。御岳を流れる多摩川には、やさしい水面から難しい水面まで色々と揃っており、1 つのことができると、また次ぎの目標が生まれるといった具合で、環境的にはとても恵まれているんです。ですから、私は飽きることなく御岳の合宿所へ通い、練習のない平日でも、時間が空いている先輩を誘っては一緒に水面に出てもらっていました。

そのため、上達は早かったように思います。まず、エスキモーロールといって、沈をしたときに起きあがる技を習うのですが、これは 2 カ月ぐらいでマスターできました。「高校までは水泳をしていたから、沈をしても平気だ」と言っていた



同期生もいましたが、結局、長続きしませんでした。彼は泳ぎが上手いだけに、沈をして川に流されてしまうと、すごく不安になるようでした。流れる水や岩

場のある水面は、プールで泳ぐのとは勝手が違います。そのことに気づいていなかったのでしょうか。キャンプやバーベキューで、泳ぎの達者な人が酒を飲んで海や川に入って流されてしまうことがあります、自信過剰になって無理をしてはいけないということだと思います。

どうせ競技をするなら難しい種目がいい

練習を重ねるうちに、意外にもサークルとはいえ競技志向があることに気づきました。ちょっと自分には合わないかなと感じましたが、もうカヌーの虜になってしまっていたし、体育会ではなかったのが幸いして続けていくことができました。

結局、4月に入ってから3カ月間練習した後、7月に岐阜県で行われた地方の大会に初めて出場することに。カヤックのスラロームの競技でしたが、泳いでしまって（沈）タイムは出ませんでした。大会前に、先輩から「1年生ではレースにならないから当てにはしない。興味があって出たい者だけ参加しろ」と言われ、私を含めて3人の新人が手を挙げたのですが、結局、その言葉通りとなりました。

あまり競技には感心がなかったのですが、いつもと違う水面でカヌーを漕ぐことに関心があったし、大会に出ると色々な地方に行けるじゃないですか。そうしたことが楽しくて、岐阜の大会を皮切りに競技生活が始まりました。

一方、大学1年生の頃は、まだテレビで観たアドベンチャー的な乗り方にも感心があったので、競技艇ではないフリースタイルの短い艇を勝手に買い求め、練習のない平日に乗り回していました。また、その年の夏が台風の当たり年で、合宿所のある御岳のあたりは10年来の増水が続いたため、アドベンチャーカヌーにとっては、もってこいのゲレンデになっていました。

さすがに1人では怖いので、先輩やOBなどを誘っては増水した川に出ていったものです。増水した川は、競技水面とは比べにならないほど水にパワーがあって、まったく別次元の楽しさがありました。増水といっても、一般的に言えば洪水で濁流になってしまった状態です。一步間違えれば命を落としてしまいますから、それはもう必死で漕ぎました。いま思えば少し怖いですが、当時は、やっと念願のアドベンチャーができた喜びに胸を躍らせていました。

9月になると、学生と一般の部それぞれで新人戦が行われ、私はカヤックのスラローム競技・学生の部で優勝、一般の部で2位に入ることができました。勝てた理由は、通常の練習に加えて暇があればアドベンチャーカヌーを楽しん

でいたため、人より川に出ていた時間が圧倒的に多かったからだと思います。サークル内でも、私は勝って当然だと思われていました。それだけ、周囲は私が川に出ていたことを知っていました。

もっとも私としては、とにかく漕ぐのが楽しくて仕方がなかっただけなんです。フワフワしていて、その反面、抵抗もある水面は、硬い地面とはまったく異なる感覚です。そこを走る、ただそれだけで気持ちが満ち足りました。



しかし、新人戦が終わって秋が深まるにつれ、アドベンチャーを楽しんでいた多摩川の水位は収まってしまい、競技の日程も終了。サークル活動も10月になって休止となり、春まで自主活動ということになりました。

4月に入学して以来、半年間に渡っ

て色々な体験をしてきましたが、ふと気づいたらそれまで夢中になっていたものが遠ざかっていました。

運命のカナディアンカヌーとの出会い

渇水期を迎える冬場でもカヌーを楽しみたい。その一番良い方策を考えました。それまで半年間乗り続けたのは、競技でもアドベンチャーでもシングルのカヤックでした。そこで、水位の下がった静かな川で別のカヌーを習ってみようと思い、目についたのがカナディアンでした。

カヤックは、コクピットに入って前方に足を伸ばして座り、ダブルブレードのパドルを使って漕ぎますが、カナディアンは正座しながらシングルブレードのパドルを使います。そのためバランスを取るのが非常に難しく、直進できるようになるのでさえ、3カ月から半年かかると言われます。当時としては、すごくめずらしい種目で、サークルでも誰一人として乗っていませんでした。私の場合、たまたま知り合いから古くなった艇を譲ってもらえたので、乗るチャンスに巡り合えました。

実際、乗ってみると見た目以上に難しく、最初のうちは何をしているのか分からない状態でした。その年の春、カヤックに初めて乗ったときと、まったく同じレベルに逆戻りした感じでした。

もっとも、最初にカヤックに乗ったときと同じように、なかなか思い通りに

進まないところが、私を惹きつけてしまいました。シーズンオフになっても、時々サークルの誰かが合宿所に遊びに来るため、そんな彼らや私に艇を売ってくれた人などを誘っては、川に出て練習に励みました。冬の間、大学の講義がない日は、まず川に出ていたと思います。

考えてみれば、入学してから半年の間にカヤックを乗れるようになり、新人戦でも優勝することができました。だから、競技としては一通りのことをやり終えたという気持ちがあって、これから先はアドベンチャーカヌーだけでいいやという思いが出て不思議はありませんでした。しかし、なかなか思うように乗れないカナディアンと出会えたことで、その考えは知らずのうちに消えてしまいました。なぜなら、そのときはカナディアンを乗りこなすこと自体が私にとってのアドベンチャーに思えたからであり、加えて、年が明けると朗報も入りました。

それは、乗り手が少ないということで日本では採用されていなかったカナディアンのスラローム（C-1 クラス）が、新たに競技カテゴリーの中に組み入れられたということでした。草レースでしたが、さっそく4月に競技が行われ、4、5名しか出場しませんでした。私が1位になることができました。前の年に何度もカヤックで競技をしていましたが、これが本格的なレース艇を自前で用意して参加した初めての競技でした。

ただ、1位になれたとはいえ、競技中は思い通りの場所へ自在に自艇を走らせることができず、とてもイライラしました。その悔しさがあるから、競技が終わると、また練習に励みました。そして、練習しても思い通りに走らない、だからまた川に出る。もう、その繰り返しでしたね。

そうこうしていると、サークルの合宿所がある御岳で、スラローム競技の国際大会が開催されることになったんです。これは、神奈川県から東京都に多摩地区が移管されて100周年を記念する、「多摩ライフ21」というイベントの一環で企画されたものでした。

1992年にプレ大会が行われ、翌1993年に本大会が開催されるというスケジュールでしたから、実に2年に渡って世界のトップレベルの選手たちが、私たちのホームグレンデにやってくるわけです。カヌーと出合って1年が過ぎ、カナディアンという自分に合った種目を探し当てた、本当に矢先の出来事でしたから、これはもう神様からの贈り物と言うほかはありませんでした。

※ 次号へ続く